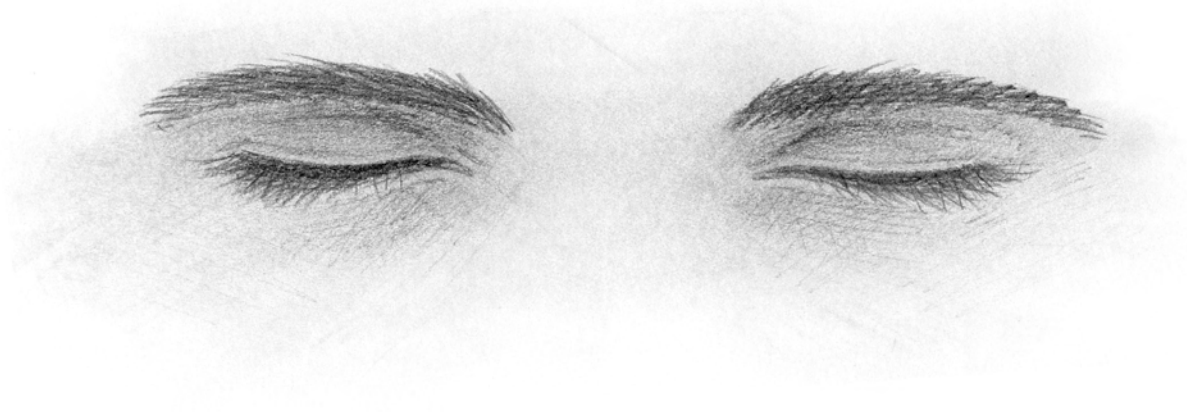


女性作家委員会研究会

「見えないけど見える— 女性と3・11」



日時： 2015年3月7日（土）午後3時～5時

会場： 日本ペンクラブ3階 大会議室

対象： 日本ペンクラブ会員、および会員紹介者

参加費： 500円

定員： 50名

※お申し込みが必要です（申し込み方法は下記）

出演者： 小林エリカ、ni_ka、小谷真理、巽孝之

電話、ファクシミリ、E-mailにて、お申し込みください。

申込み先： 日本ペンクラブ事務局（担当：高田）

電話：03-5614-5391

ファクシミリ：03-5695-7686

E-mail: secretariat01@japanpen.or.jp

※定員に達し次第、締め切ります。お早めにお申し込みください。

主催：一般社団法人 日本ペンクラブ

女性作家委員会研究会 「見えないけど見える ―女性と3・11」

2011年3月11日から丸4年。この間、文学や映像、音楽などさまざまな分野が、災害や原子力をめぐる思索で満ちあふれた。とりわけ、3・11以後の時代を表現するのに、文字と画像を自由自在に横断する女性作家たちの果敢な実験は、注目に値する。

片や漫画から小説へ、そしてそれらの融合体へと赴く小林エリカと、片やハイテク拡張現実 (AR=Augmented Reality) と詩の混淆体をもくろむ ni_ka。見えているのに見えないもの、見えないのに見えるものを求めて飽くなき探求を続けるふたりの創作活動は、まぎれもなく21世紀文学そのものの指標になるだろう。

<出演者プロフィール>



小林エリカ (作家・マンガ家)

東京生まれ。1999年、ミュージカル・アニメーションおよびマンガで『爆弾娘の憂鬱——恋の放射能』を発表しデビュー。以後、2002年には9.11同時多発テロ以降のノンフィクション・ノベル『空爆の日に会いましょう』(マガジンハウス)を発表。2011年にはアンネ・フランクと実父の日記をモチーフにした『親愛なるキティーたちへ』、『光の子どもI』(リトルモア)が話題に。2014年に発表した『マダム・キュリーと朝食を』(集英社)では芥川賞・三島賞両賞最終候補。



ni_ka (アーティスト・詩人)

東京生まれ。AR (拡張現実) 技術を用いた「AR詩」や、絵文字・デコ文字を多用した「モニタ詩」や様々なジャンル横断的な作品を発表し、注目を集める。『DOMMUNE オフィシャルガイドブック2』にて「2012年の日本を発電させるカルチャーエネルギーベスト100!!!!!!」のひとつに「AR詩」が選ばれるなど、高い評価を得ている。東日本大震災後には、AR技術を用いて新しい喪の形式を模索するとともに、現代の新しい生の感覚を表現するために、言葉とイメージの境界を解体する新しい表現の創造を行っている。



小谷真理 (SF & ファンタジー評論家、明治大学客員教授)

富山生まれ。著書『女性状無意識』(勁草書房、1994)で第15回日本SF大賞受賞。共訳書『サイボーグ・フェミニズム』(ダナ・ハラウェイほか、トレヴィル、1991年、増補新版、水声社、2001年)で第2回日本翻訳大賞思想部門受賞。以後の著作は『聖母エヴァンゲリオン』『ファンタジーの冒険』(ちくま新書)、『おこげノススメ』(青土社)、『エイリアン・ベッドフェローズ』(松柏社)、訳書にジョアナ・ラス『テクスチュアル・ハラスメント』など多数。<日本経済新聞>(水曜夕刊読書欄)で「目利きが選ぶ三冊」を連載中。



異孝之 (慶應義塾大学文学部教授、アメリカ文学者)

東京生まれ。主著に『サイバーパンク・アメリカ』(勁草書房、1988年度日米友好基金アメリカ研究図書賞)、『ニュー・アメリカニズム』(青土社、1995年度福沢賞)、『リンカーンの世紀』(青土社、2002年)、『モダニズムの惑星』(岩波書店、2013年)、『Full Metal Apache』(Duke UP、2006、2010年度国際幻想芸術協会 [IAFA] 学術賞)。編訳にラリー・マキャフリイ『アヴァン・ポップ』(筑摩書房、1995年)、編著に『反知性の帝国』(南雲堂、2008年)、『カート・ヴォネガット』(彩流社、2012年)ほか多数。